

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：84413

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720052

研究課題名（和文） 植民地朝鮮における韓国近代工芸-浅川伯教の活動を中心に

研究課題名（英文） Study on the History of Modern Korean Crafts: Viewing through the Activities of ASAKAWA Noritaka

研究代表者

鄭 銀珍 (JUNG Eunjin)

公益財団法人 大阪市博物館協会・大阪市立東洋陶磁美術館・学芸員

研究者番号：20531263

研究成果の概要（和文）：本研究は、浅川伯教の活動を通して近代韓国陶磁をめぐるさまざまな側面を明らかにしようとするものである。重点は以下の通り。(1)日本は陶磁器を韓国へ輸出するなかで、韓国人の好みについて周到な調査を行った。(2)浅川は韓国陶磁を研究するうえで、民俗学的方法を用いた。(3)浅川は韓国の陶磁産業の復興を目指し、その成果のひとつが戦後まで生き残っていた。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to elucidate the various dimensions of ceramics in modern Korea, focusing on the activities of ASAKAWA Noritaka. The followings are the major points. (1)The Japanese had been conducting a thorough survey on the taste and preference of the Korean people while they exported the ceramics to Korea. (2)ASAKAWA applied the ethnological approach to investigate the Korean ceramics. (3)ASAKAWA pursued the recovery and reconstruction of ceramics industry in Korea, and one of his achievements had survived up after the war.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：陶磁史・韓国近代・浅川伯教・浅川巧・産業陶磁・民藝

1. 研究開始当初の背景

浅川伯教・巧の兄弟は、植民地朝鮮に暮らしながら、柳宗悦の朝鮮美術工芸への橋渡しの役割を演じ、日本の民芸運動発生への契機を作った人物のである。とくに伯教は、韓国陶磁史の先駆的研究者として知られ、植民地期朝鮮で、地方窯の調査、そこでの作陶、韓国人陶工の指導など、独特な活動を展開した。勤務先の美術館にこの浅川伯教関連の資

料が寄贈され、それにもとづいて小規模な展覧会を行った。その際、準備のためにいろいろ調査したところ、とくに伯教にかんしては、重要な人物のわりには、これまでほとんど研究がなされていないことが判明した。これが本研究の直接の動機である。

2. 研究の目的

浅川の当時は、日本から大量生産された陶

磁器が流入したことによって、韓国の在来陶磁産業が危機にひんしていた。そうしたなかで浅川伯教は、単に陶磁史の研究者であるに止まらず、ひろく陶磁器の制作面にも立ち入った工芸理論を提唱し、実践した。したがって、浅川の活動内容は、韓国の陶磁産業が置かれた状況を知るための基本資料ともなりうる。

本研究は、浅川伯教の活動の全体像を再構成しつつ、それを通して、近代韓国の陶磁器をめぐる状況を明らかにしようとするを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料の整理とデータベース化

浅川伯教制作の陶磁器、その収集陶片、本人執筆の文献、スケッチ等を整理する。

(2) 当時の日本・韓国発行の各種文献のさらなる調査収集（文献調査）

当時の日韓双方の新聞雑誌から、朝鮮半島の窯業と工芸品、日本の産業陶磁の進出、美術界の動向等の記事を収集する。

(3) 浅川伯教自作の作品の調査、作陶を行った窯跡の調査、聞き取り調査（現地調査）

伯教が作陶したと思われる窯場の調査と、植民地時代に陶業に携わっていた韓国人陶工からの聞き取り調査を行う。また、日本国内で韓国向け陶磁器を作製した窯跡の調査を行う。

4. 研究成果

本研究は、最終的に博士論文『近代韓国陶磁史研究—浅川伯教・巧兄弟の活動を軸として』にまとめることができた。以下では、その章立てに沿って概要を記す。なお、陶磁器の概念として高麗時代の陶磁器には「高麗陶磁」、朝鮮時代のものに対しては「朝鮮陶磁」、上位の概念としては「韓国陶磁」を適宜用いる。

(1) 第一章「近代日本産業陶磁の朝鮮半島への進出」

近代日本の産業陶磁がどのように韓国に進出したのか、その具体的な様相を、この分野ではこれまで使われることのなかった史料『通商彙纂』によって詳細に明らかにし、あわせて、現地調査によって日本側のその窯場がどこにあったのかを網羅的に調べあげた。

従来、進出の状況については、まず肥前が入り、1930年代に至って瀬戸・美濃が韓国市場を支配したと単純に考えられてきたが、実は早くから肥前と瀬戸・美濃が競合し、しかも両者には製品別の棲み分けがあったことを、明らかにした。肥前はすこし大きめのサバルや尿罐を、また瀬戸・美濃はそれより小さめの皿などを多く製造した。これは恐らく壊れやすさと関係しているだろう。

また肥前では白色のものが多かったのにたいして、瀬戸、美濃では白色とともに青色、花文様が多い。両地方に現在残されている実物資料を調査すると、肥前物は釉胎がかなり美しい白色なのにたいして、瀬戸、美濃は多少灰色がかっている。この欠点を補うために青色や花文様を多用したものと思われる。

さらに、日本陶磁が進出するにあたっての重要な課題が日本産の粗悪品の問題であり、そのために日本領事館が重ねて警告を発し、また一方で、韓国人の好みを詳しく調査していた。

日本側の窯場については、これまで嬉野、塩田、波佐見などの地区で韓国向け陶磁器が製造されていたことは知られていたものの、その具体的な状況および他地域については不明だった。本稿では、肥前、愛知、岐阜に分けたうえで、それぞれの具体的な状況をできるかぎり明らかにした。

(2) 第二章「韓国内における陶磁生産状況」

朝鮮総督府の政策が韓国の陶磁産業にあたえた影響と、高麗青磁復元の過程を明らかにした。近代においては、陶磁産業が衰退するなかで、官民がその近代化に務めたが、まもなく植民地化されたことにより、その課題は朝鮮総督府のもとで遂行されることになった。そして、日用品的な陶磁器はおもに日本人の民間工場が優位を占めて生産し、工業伝習所や中央試験所が技術員の養成や原料の調査、また各種試験でそれらの工場を間接的、直接的に援助した。

また美術品としての高麗青磁の復興は、工業伝習所、中央試験所、美術品製作所、富田儀作などが取り組み、戦略的に高麗青磁の複製品が商品化されていたことが分かる。その水準は、これまでの通説とは異なり、かなり高いものだったと想像される。そのほか朝鮮総督府は、朝鮮半島内の産業育成の一環として、将来性のある韓国人経営の窯をも援助した。

(3) 第三章「韓国陶磁の受容と研究」

本章および次章では、近代以降に韓国の在来陶磁器が高く評価されてゆく過程を扱う。青磁や白磁等の再評価である。その際、従来の研究者が見落としてきた当時の欧米での受容の様相や、また考古学、民俗学等の周辺分野の研究状況もあわせて検討し、より広い視野から、韓国陶磁の受容と研究の基礎がどのように形成されていったのかを明らかにした。

韓国陶磁にたいする研究は、まず欧米で始まった。ただし、朝鮮の開国以降は、基本的には日本が占めた政治的地位によるのだろうが、やや遅れて研究に参入した日本人研究者が急速に研究を進展させ、古代以来の陶磁

史を時期区分するなど、すぐに欧米の研究水準を超えたと思われる。そのため、アメリカにおけるコレクションの形成においても、日本人研究者、美術商の美意識がそこに介在したことが想定される。

ただし、八木柴三郎や関野貞の時代には、人類学教室の八木が陶磁器を研究するなど、陶磁器研究そのものがまだ未発達、もしくは未分化だったように見える。それに対して1922年の浅川伯教論文や、またとくに同年の奥田誠一論文が陶磁器の美的側面を詳細に論じており、このころから美術史的研究が本格化すると考えたい。また考古学的な陶磁研究は、1914年ごろの末松熊彦による高麗青磁窯跡の発見や、27年の野守健による鶏籠山窯跡発掘が一つの指標になるだろう。このように研究が分化、進展していくなかで、そこに陶磁愛好者もしくは骨董界の動きが密接に結びつき、「鶏籠山」を起点とする「李朝ブーム」をも引き起こすことになった。そして、それとの相乗効果のなかで、研究自体がさらに進展してゆく。

一方、ここでふたたび西洋に目を転じてみると、朝鮮陶磁に関しては、それを正に評価すること自体が非常に遅かった。中国陶磁の権威であったイギリス人・ロバート・ホブソン (Robert L. Hobson) はユーモルフォプロス・コレクションの図録 (1928年) で、朝鮮陶磁を依然として「劣っていて」「粗悪」なものとしている。その本格的な評価はヴィクトリア・アルバート美術館のウィリアム・ハニー (William Honey) の著作 (1944年) を待たねばならなかった。朝鮮陶磁は欧米人の美意識になじみにくかったことがうかがえる。

(4) 第四章「近代朝鮮研究とフィールドワーク」

浅川の研究方法は、朝鮮全土を広く歩き回り、現地調査すなわちフィールドワークによって資料を収集し、研究しようとするものであり、陶片収集のみならず、当時操業中の窯場や作業工程について、文章による記録およびスケッチなど、いわば窯業に関する民俗調査も並行して行った。それは韓国陶磁の特質を理解するために必要な調査であり、朝鮮時代には、それなりのすばらしい生活文化があったことを強く主張しようとしたのであろう。そして浅川巧の著作にもはっきりと現れているように、通常の民俗学的研究が、どちらかといえば冷ややかな眼で朝鮮の事物を見ていたのに対して、この兄弟はそこに美しさと、「尊敬すべき要素」を見て取った。

浅川伯教は最初の論文「李朝陶器の価値及び変遷に就て」(1922年)で、こうした研究の方向をつかみ、『釜山窯と対州窯』(1930年)第1章でそれを方法論として確立したのち、

さらに調査を進め、「朝鮮古陶史料大展覧会」(1934年)で研究の集大成を行ったと想像される。それは、「陶片を読む」という、当時としてはきわめて斬新な手法に裏付けられた、科学的、実証的な研究でもあった。浅川伯教の方法は、従来、陶磁研究の枠内でしか論じられてこなかったが、民俗学的研究方法と、考古学的研究方法を統合したものであった。

ただし、その成果を文章化し、体系的な朝鮮陶磁史へと組み立てることまではできなかった。陶磁研究者としての浅川伯教の限界だったと言うべきだろう。しかし幸い、調査資料の一部は我々に残され、韓国、日本、アメリカに散らばっているとはいえ、陶片も残された。

(5) 第五章「“民藝”の萌芽と地方への視点」

「民藝」は、日常的かつ実用的な生活用品のなかに美しさを見出そうとする思想であり活動だったが、近代化、産業化の進みつつあった日本では、そのような生活用品は、もはや都市ではなく地方でわずかながら生産、使用されるのみだった。そこで、「地方」が民芸の重要なキーワードとなる。こうして、そもそも「大日本帝国」にとっての「地方」である朝鮮半島で「民藝」が発見されたのち、益子をはじめとする日本本土の各地に及んで発展を遂げつつ、日本の周辺地域である沖縄やアイヌ、そして最後には台湾や満州にも視野の拡大を見せはじめる。

この運動に関わった人たちは、ゆるやかなネットワークを形成し、たがいに意見を交わしながら、それぞれの仕事に従事していたと思われる。そのなかで浅川兄弟は、柳宗悦を朝鮮の工芸へといざなっただけでなく、ともに朝鮮半島で、のちの民藝運動の原形となるような活動を、日本にさきだって展開した。これは、従来の研究では触れられなかった部分である。

さらに兄の伯教は、朝鮮陶磁への評価からさらに一歩進んで、はやくから地方に関心を持ち、経済面にも着目してみずから作陶し、また指導した。そして会寧窯では一定の成果を収め、また谷城や高敞の窯では、1930年代半ばに日本人が訪れて製品を注文した。当時、このような地方窯を日本人に紹介できた人物としては、古窯、操業中の窯を問わず地方窯研究の第一人者であり、日本の愛陶家とも関係の深かった浅川伯教を、まず想定すべきだろう。それが、柳宗悦や東京の愛陶家へとつながっていったと考えたい。

そして高敞では、じつに1970年代にいたっても日本から注文を受けることがあった。浅川伯教の地道な活動から出発したと思われる動きが、ながく継続したのである。それは朝鮮全体からすれば、わずかな成果しか生

み出さなかったかもしれない。また朝鮮総督府の政策内に留まるものと見ることもできよう。しかし伯教は、日本からの大量生産品の流入と工場の進出によって職と生活とが奪われつつある陶工、すなわち生産者に対する視点を明確に備えていた社会的、実践的研究者だったことは否定できない。

韓国人研究者は通常、植民地期の韓国陶磁器を、日本趣味が加わって韓国の伝統を変質させたものと位置付けている。だが、陶工もまた人間であり、生きてゆかねばならない。そのころ陶磁器は、日本から大量生産品が大規模に流入し、また日本資本によって朝鮮内にも大工場が建設されていた。その圧倒的な力の前で、伝統的な陶工たちには、ほかにどのような道が残されていただろうか。しかも韓国の陶磁にもっとも興味を示し、またそれを買い取る経済力を持っていたのは、当時ではやはり日本人だった。柳や「東京の愛陶家」が注文したときのように、その好みにある程度合わせるの、仕方のないことだったと考えるべきだろう。むしろ逆に、それが生き残りのための戦略だったとも言える。かつて明治期の日本が、韓国を含めて海外の消費動向を熱心に研究したのと同じことだろう。

ただし、それでも浅川伯教は、できるかぎり伝統に忠実でありつつ、陶工たちの生きる道を切り開こうとした。民芸運動の先駆ともいべきこうした活動は、浅川伯教の実績を考える場合にも、さらに、日本におけるその後の民芸運動の展開に対しても、見逃すことのできない重要な意味をもつものと思われる。

(6)終章「オリエンタリズムと柳、浅川兄弟」

大航海時代以来の、西洋とそれ以外の地域との異文化接触の歴史を整理し、近代における陶磁器をめぐる韓国と日本との関係も、そのような大きな歴史の流れの末端に位置するものであることを論ずる。

大航海時代以前にも、たとえば中国、東南アジア、日本をめぐる海域では、人々が活発に活動していた。ただし、そうした活動が近代へとつながってゆくのは、やはり大航海時代以降だろう。その動きは、異なった文化をもつ地域を発見し、理解し、また多くの場合、それを植民地化しながら、進展していった。そのなかで日本は、西洋から見ればそのような「対象」であったと同時に、アジアの他地域に対しては、みずから「主体」となろうとした。柳や浅川兄弟は、良くも悪くも、このような枠組みのなかで生きざるをえなかった。そのためにさまざまな限界を抱えながらも、しかしぎりぎりまで他国の文化に近づこうとしたと言っただろう。

ただし異文化を研究したり理解したりすること自体が目的なのではなかった。高階秀

爾によれば、ジャポニスムは単なるもの珍しさを求めた異国趣味ではなく、伝統的絵画を革新しようとする近代ヨーロッパの動きのなかで、日本の美術がそこに一つの範例を提供したのだという。第三章や第五章で論じたように、浅川兄弟や柳も、朝鮮の工芸品に単なる目新しさを求めたのではなかった。かれらには、近代的な工業製品によって押しつぶされてゆく伝統産品への危機感があった。朝鮮半島でも、王朝の官窯が崩壊する一方で、日本の工業製品が大量に流入しはじめ、朝鮮の陶磁産業は衰退の一途をたどっていた。浅川兄弟は、最初から工芸を目指して朝鮮半島に赴いたのではないが、まもなく、暖かみのある伝統的工芸品の魅力にとりつかれてしまった。近代的な無機質な大量生産品に対する対抗意識と、伝統産業の復興という点において、浅川兄弟のコリアニスムは近代的なものへの挑戦でもあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 鄭銀珍、日本産業陶磁の朝鮮半島への進出、立命館大学考古学論集VI(和田晴吾先生定年退職記念論集)、査読無、2013、445-464

〔学会発表〕(計2件)

① 鄭銀珍、朝鮮に魅せられた兄弟—浅川伯教と巧、越境する日本人—工芸家を夢みたアジア 1910S-1945 展連続講演会(招待講演)、2012年6月10日、東京国立近代美術館

② 鄭銀珍、韓国近代陶磁と浅川伯教と巧(仮)、朝鮮史学会例会(招待講演)、2013年7月27日、中津センター

〔図書〕(計2件)

① 鄭銀珍、他、美術館連絡協議会、浅川伯教の眼と浅川巧の心—朝鮮時代の美、2011、207

② 鄭銀珍、他、里文出版、浅川伯教の眼と浅川巧の心、2011、224

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鄭 銀珍 (JUNG Eunjin)

公益財団法人 大阪市博物館協会・大阪市立東洋陶磁美術館・学芸員

研究者番号：20531263